

・資料に見る東幡豆の観光業・

表1 新聞記事から見る東幡豆の海水浴

掲載日	使用されたワード	人数の詳細	人数
1952.7.26	うなぎ上り、驚異的数字	S24年7月の人数(東幡豆)	16,429
//	うなぎ上り、驚異的数字	S24年8月の人数(東幡豆)	26,702
1951.7.29	戦後最高記録、芋を洗う混雑	一日の人数(東幡豆)*	15,000
1951.8.5	戦後最高の大混雑	一日の人数(東幡豆)*	20,000
1951.8.16	うれしい悲鳴	7月中旬～8月半ばの人数(幡豆)*	200,000
1953.7.31	道路が通行困難なほど人の波	一日の人数(東幡豆)*	10,000

注：*はアバウトの人数

出処：『幡豆町史資料編3 近代・現代』より作成。

表2 うさぎ島・猿が島および三ヶ根山における観光開発

年度	うさぎ島・猿が島の主な出来事	年度	三ヶ根山の主な出来事
S25	前島に電灯設置	S27	三ヶ根山総合開発計画の開始
S26	前島に植樹、300mの道路整備、道路中間に架橋	S33	三河湾一帯が国定公園に指定
S32	うさぎ島・猿が島の開島、名鉄観光船の運航開始	S35	国民宿舎ホテル三ヶ根荘の建設
S45	うさぎ島、猿が島に公衆便所完成	S38	有料休憩所、子供遊園地、回転展望台の完成
S52	開島20周年記念イベント	S43	スカイライン開通
S60	クジラ型遊覧船が就航	S44	2002mの遊歩道、無料駐車場の完成
S63	うさぎ島・猿が島の海上綱引大会	S60	あじさいラインの完成

出処：『幡豆町史資料編3 近代・現代』、『幡豆町報』より作成。

3. 暮らしを育む海

海とともに生きる人々の暮らし、
美しさと豊かさと誇りを育んできた
東幡豆の海の昔と今を紀行する。



昔
Past

【昭和 28 年～ 41 年（1953～1966）頃・町並みの様子】上は昭和 41 年（1966）頃の森川近辺の路地の様子。この頃は森川の水量が豊富にあり、道はまだ砂利道の様子。横には、潮風から守るために黒く塗られた黒壁の家屋が並ぶ。下は昭和 28 年～ 33 年（1953～1958）頃の幡豆町看板周辺の様子*。「幡豆村」が町制を施行し「幡豆町」となったのは昭和 3 年（1928）。その時から建てられていた看板であると見られる。



今
Present

【2016 年・町並みの様子】昔からの家屋が多く残っており、新旧家屋の混在した歴史溢れる町へと変わっている。黒壁の家屋は現在でも見られる。下は東幡豆駅の様子。昭和 11 年（1936）に開業されて以来、とくに観光が盛んであった時代は、名鉄蒲郡線の拠点として活躍した。また、幡豆石を各地に運ぶ貨車が利用する駅でもあった。乗車料金は、2017 年現在、蒲郡から東幡豆まで片道 350 円。





昔
Past

【昭和 52 年（1977）・津島神社の様子】東幡豆は森組、小見行組、桑畑組等の組（地区）に分かれており、津島神社は小見行組の氏神社である。時折、結婚式も行われていたようである。後方には豊かに茂った松の木と鳥居の様子が確認できる。



昔
Past

【昭和 31 年（1956）・八幡宮の様子】森組の氏神社である八幡宮、地元では森神社とも呼ばれる。写真は、神社のお祭り（上）の様子と幡豆青年団所属の森組青年団（右）。幡豆青年団の別称は幡豆町青年団体連絡協議会（幡青協）。昭和 25 年（1950）に誕生し、様々な活動を行っていた。



今
Present

今でも森神社は、地区の集会やお祭りが開かれたり、地元住民がお参りに訪れたりする場所であり、暮らしの身近な存在となっている。



昔
Past

【昭和49年（1974）・妙善寺の様子】最初は天平年間（729～749年）に創建された天台宗の寺院であった。現在は、「浄土宗西山深草派」という宗派に属する。通称ハズ観音、かぼちゃ伝来発祥の地としてかぼちゃ寺とも呼ばれる。この地で祈れば病はたちどころに癒え、とくに成人病予防、中風除けに靈驗あらたかと信仰を集めている。



今
Present

【2016年・妙善寺の様子】今も全国各地よりたくさんの人々が参拝に訪れる三河の名刹。毎年冬至の日には、全国各地より寄贈された南瓜を用いた「かぼちゃしるこ」が参拝者に振舞われることで有名。建物の両側に見えるマキは、天然記念物として町の文化財に指定されている。



昔
Past

【昭和40年（1965）頃・妙善寺前広場の様子】当時は東幡豆海岸発展会が発足されており、妙善寺前の広場で盆踊り等様々なイベントを企画していた。写真は盆踊りの様子。簡易ステージが作られ、ステージ上で盆踊りを踊っている踊り手たちを見る人たちで賑わう。今では、大学の実習で訪れる大型バスの駐車場や地元住民が世間話等に集う場へと変わっている。

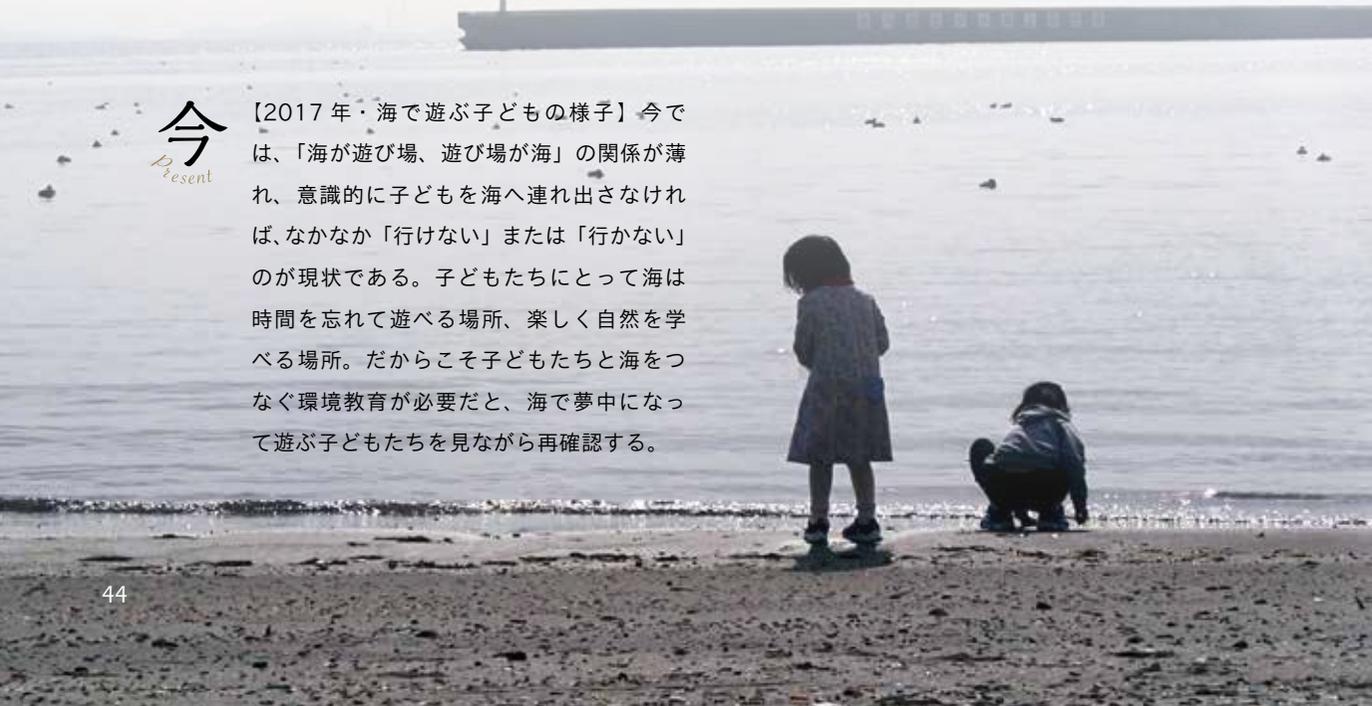


昔
Past

【昭和 28～33 年（1953～1958）頃・海で遊ぶ子どもの様子*】海泳ぎ、砂遊び、石遊び、貝殻遊びなど、子どもたちにとって、「海」といえば遊び場、「遊び場」といえば海であった頃の様子。干潟では、子どもたちが手づくりマンガで、エビやカニ、カレイ等をとって遊んでいたという。

今
Present

【2017 年・海で遊ぶ子どもの様子】今では、「海が遊び場、遊び場が海」の関係が薄れ、意識的に子どもを海へ連れ出さなければ、なかなか「行けない」または「行かない」のが現状である。子どもたちにとって海は時間を忘れて遊べる場所、楽しく自然を学べる場所。だからこそ子どもたちと海をつなぐ環境教育が必要だと、海で夢中になって遊ぶ子どもたちを見ながら再確認する。



今
Present

【2017 年・魚直の様子】今年（2017 年）で創業 90 年目を迎え、東幡豆の魚食を支えてきた魚食処、魚直。現在の場所に移ったのは昭和 42 年（1967）。それまでこの場所は、東幡豆漁協の事務所であった。ご主人、ご主人の息子夫婦、奥さんの兄弟夫婦 5 人で切り盛りしている。

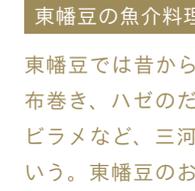
東幡豆の魚介料理あれこれ



ワカメのしゃぶしゃぶ



アサリの酒蒸し



東幡豆では昔から、アサリはもちろん、ノメリコチやハゼの昆布巻き、ハゼのだし汁で作ったとろろ、さんまのみそ煮、シタビラメなど、三河湾域で獲れる様々な魚介料理を食べていたという。東幡豆のお食事処や民宿では、地元で獲れた旬の魚介類をいただくことができる。



茹でアカニシのお刺身



大アサリの浜焼き



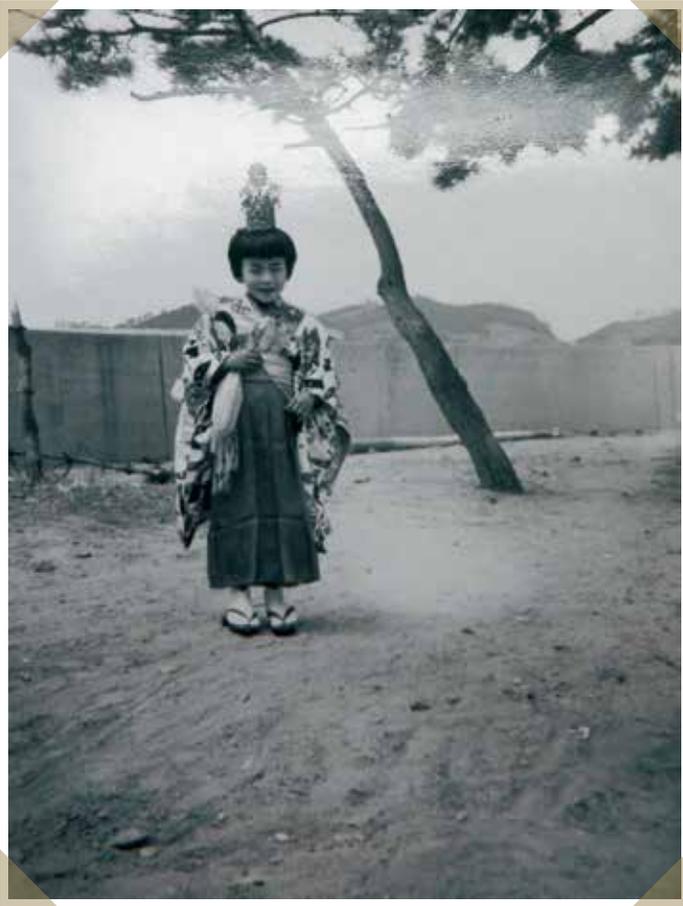
焼きガザミ



イダコ煮と
地元のお酒・尊皇

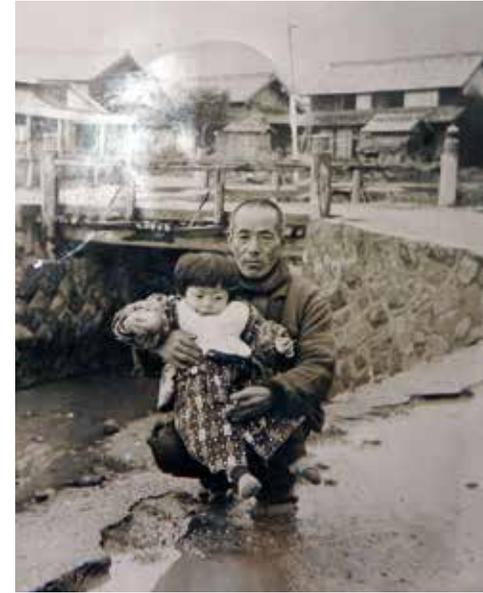


コウソウガレイの
煮付け



昔
Past

【昭和40年（1965）頃・お稚児さんの様子】稚児行列に参加する子ども。今でも稚児行列の風習は、お寺や神社のお祭りやお祝い事の時に見られる。写真(上)は森神社にて。



昔
Past

【昭和39年（1964）頃・森川の様子】主婦たちが子どものおしめを洗ったり、子どもたちがうなぎのつかみ取りや手作り柴（木の枝を束ねたもの）でエビやカニをとって遊んだり、河口では人々がアサリをとったりしていた森川。写真は岡田屋ご主人の祖父と妹さん。



今
Present

【2017年・森川の様子】今の岡田屋の前を流れる森川。地元住民がアサリをとる様子は今でも時々見かけられる。写真は、左から岡田屋のご主人、奥さん、板さん、娘さん。

昔

【昭和 39 年（1964）頃・海辺にて地元女性の様子】森川すぐ横の堤防で撮影された美しい女性は、魚食レストラン魚直の奥さん。後方には、泳ぎやボート遊びで海を楽しむ人々が写っており、海水浴場で人気であった時代を彷彿とさせる。



今

【2016 年・海辺にて観光客の様子】今でもこの場所は、地元住民や観光客の撮影スポットとしての役割を果たしている。幡豆石で建てられた堤防の様子も変わらない。緑色に広がるのは、観光客の子どもたちが時々間違っってワカメと呼んでいるアオサ。



昔

Past

【昭和 46 年（1971）・神前橋にて地元女性の様子】「美しい湖に架かる橋に美しい女性が立つことは罪である」という、美しすぎる自然と人の融合を表現した台湾小説家チョンヤオ氏の、西湖（中国浙江省）を舞台にした作品が思い浮かぶ。写真の女性は、岡田屋ご主人の叔母。右後方には昔の岡田屋が写る。



今

Present

【2017 年・神前橋にて観光客の子ども様子】海が写り、川が写るここは、地元住民だけではなく、観光客もワンショットを残したくなる場所。写真は、森川河口の生き物を夢中で見ている子どもたちをカメラがとらえた様子である。



東幡豆の人々は、自然（とりわけ海）と調和した暮らしを送りながら、古くからの伝統行事などを大切にしている。ここでは、日常が垣間見えるエピソードを、海とのかかわり、民俗文化の面から紹介したい。

●海と人々のかかわり

海はすぐそこにある身近な自然であり、魚介が生息する恵みの産物であり、さらには子どもたちの親しい友人である。

民宿鈴喜館のご主人が子どもの頃（1970年前後）は、海で魚をとって遊ぶのが普通のことだったという。例えば満潮時に古タイヤを海に投げ入れておく。潮が引いて干潟にあがったタイヤを覗くと、タイヤの輪の中に取り残されたうなぎを発見できるのだそうだ。ヤマモモの木の枝を束ねて沈めておいても、アナゴが入っていたりする。それから、この地域でよくとれておいしい魚介といえばモガニ（ガザミの通称）なのだが、そのとり方として、モガニが潜り込んでいる岩と岩のあいだに軍手を2枚はめた手をそっと入れる。するとモガニが軍手をハサミで挟んでくる。

そうして、痛いけれどじっとがまんして、最後にはモガニの捕獲に成功するのである。ちなみにこのモガニをかまぼこ板に巻き付けて、カニが好物であるタコを釣ったりもしたようだ。

昔は今と違って娯楽と呼ばれるものの種類が少なかった。その分、子どもたちは工夫して、身近な海で楽しく遊んでいたようである。遊びに使うものも、身の回りにあるものばかり。物は少なくとも、豊かな暮らしがあったことがうかがえる。

現在はというと、子どもたちが海へ入ったり泳いだりする機会はほとんどなくなっている。とはいえ、今も海岸で貝殻拾いをする子どもたちや海岸沿いを散歩するお年寄りの姿を見ることが出来る。魚食²⁵で見たように、海は変わらず美味しい魚介類を恵んでくれるし、アサリの時期になると人々は森川²⁷や海岸でアサリとりをするという（地元住民に限り、潮干狩り場ではなくても自由にアサリをとることが出来る）。海での遊び方や海との付き合い方は変わったが、海が暮らしに寄り添っている

ことは昔も今も同じである。

●「組」と地域に根ざした民俗文化

東幡豆には小さな神社が点在している。これは、東幡豆地区がさらにいくつかの「組」に分けられており、組ごとに氏神社があることがひとつの理由である。「組」は町内会の区切りであり、明治時代まであった「村」の名残でもある。

ここで東幡豆の変遷について簡単に述べておくと、まず、明治11年（1878）に、東幡豆地区の9村が合併して「東幡豆村」となった。そのときの村が、^{ししかわ}鹿川村、^{すまき}洲崎村、^{ひこだ}山口村、^{うへはた}谷村、^{くわはた}彦田村、桑畑村、^{こけんぎょう}森村、小見行村で、これが今の「組」の前身といえよう。明治39年（1906）には、東幡豆村は隣の幡豆村（西幡豆、鳥羽、寺部からなる村）と合併して「幡豆村」になる。その後、幡豆村は町制を施行し、「幡豆町」となったが、2011年に西尾市へと編入され、東幡豆は「西尾市東幡豆町」として今にいたる。

すでに見たように、例えば津島神社²⁰

は小見行組の氏神社であり、八幡宮²¹は森組の氏神社である。今でも人々は新年の初詣、年一度のお祭りといった特別なイベントのほか、日常的に氏神社へ赴き、お参りをしたり、公民館で集会をしたり、境内の清掃をしたりして、自分たちの守り神を身近に感じながら大切にしている。

沖島には、民話にも登場する弁財天が頂上の沖島社に祀られており、毎年秋には大祭が行われる。この祭礼を執り行うのは小見行組である。当日はまず子ども神輿が「ワッショイワッショイ」と元気よく町を練り歩き、その後、船に乗り込んで人々は沖島を目指す。島では沖島社の扉を開いて弁財天に祈願をし、皆でふるまいの品をいただきます、お社から餅投げをする。先祖代々受け継がれてきた祭事が、今もこうしてつづがなく遂行されている。

東幡豆では、地域のつながりや古くからの風習を大切にす懐かしくあたたかい暮らしが今なお営まれている。それは、ここに生きる「人」の確かな存在があってこそなのである。（本間咲来）

旅日記
Vol.3

たくさん見て歩いて
ついに宿に到着。
でも夜は長いのです…

トンボロ干潟



みんなで
記念撮影

干潮時に現れるトンボロ干潟。昔の子どもたちも、前島まで歩いて行って、遊びながらカニや貝をたくさんとったんだそう。

妙善寺

ハズ観音妙善寺には、通称「かぼちゃ寺」という名にちなんで、冬至前の11月には境内にたくさんのかぼちゃが鎮座していました。



かぼちゃの中に
観音様！

民宿鈴喜館

本日のお宿はこちら。主館は切妻造の洋館風和風建築。離れもたくさんある大きな民宿です。



広い部屋で大はしゃぎ



深夜のセリを見学

小規模ながら、いろいろな魚介が小さな船でどんどん届きます。セリ場にはかわいい来客（猫）も。落ちた魚をちゃっかり加えて、すたこらさつきと闇に消えていきました。

ごちそうがいっぱいニヤン

